

# 文部時報

第1037号

昭和39年 1月

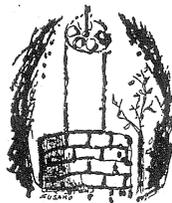


<座談会>	
“長期教育計画の視点”	2
(出席者) 平塚 益徳・坂本 二郎 熨斗隆文・(司会)天城勲	
第2回 日米文化教育合同会議報告	25
天 城 勲	
、 * * *	
昭和38年度	
全国小・中学校学力調査結果の概要	92
調査局 調査課	
<hr/>	
<随 想>	
明治末期の音楽教育と私	信 時 潔 36
■連載 第六回■	
人物を中心とした明治以降女子教育史	39
平塚益徳・広中和彦	
<hr/>	
文部省の行事・会議から	32
昭和39年度使用表紙図案入選者	96
文部省重要通達一覧	95

表紙 及川保之 カット 須貝夫早子

# 明治末期の 音楽教育と私

信時 潔



明治二十五年大阪生まれの私が音楽に志したのは中学五年の時  
で、その頃の洋楽といえば学校唱歌と教会の讃美歌であり、楽器  
は教会はもちろん学校でもオルガンであった。讃美歌の方は四部  
合唱体の伴奏も使われていたが、唱歌はオルガンでひかれる旋律  
にあわせてうたうのが通例であった。教材は明治初年に伊沢修二  
先生が編纂された「小学唱歌集」からのものが多かった。今でも

うたわれる「庭の千草」「春の弥生」等のある三巻のもので、曲  
の選択と言ひ、外国の原詩の意を巧に日本的に翻案した歌詞と言  
ひ実にりっぱなものとも信じている。私はそれらの曲をまだ  
譜の読めぬ頃からたいがい母の口伝えでおぼえていた。それが私  
の音楽学校入学の試験問題でもあった。今日から見て全く隔世の  
感があるが、考えてみるとそれだけでも受験者の音楽的素質は相  
当わかるわけで、書道でいろはを書かせてみるのと同様である  
う。そんなことで上野へ入学し、今では小学生でもひいているバ  
イエルやツエルニーを習ったのである。学校ではその頃エンケル  
先生が日本でただ一つのオーケストラを育成中で、学生はピアノ  
科でも声楽科でもたいがいつかまつて何かの管絃楽器を習わされ  
た。私はセロをやることになり、図書室で古い教則本を見つけて  
来てエンケル先生に手ほどきをしていただいた。先生はヴァイオ  
リンの名手であったがセロのひき方はよく知られず、本の図解を  
見てやれとのことであった。私の奏法はあてずっぽうでも音は音  
であるから、耳のいい先生は稽古の時ちよつとの音程やリズムの  
狂いもゆるさず、時々背中をドスンとたたかれた。そのうちに本  
式のセリスト、ウエルクマイステル先生が来日され、改めてひく時  
の構え、運ぶ時の持ち方から教わったのである。作曲を勉強する  
ことになったのは研究科に入ってからであるが、セロで合奏に参  
加したことが音楽を知るために何よりありがたい経験であった。  
正規の授業のほかに、外人教師や幸田先生姉妹の加わった室内楽

練習にいつも押し入って譜まくりなどしながらきかせて貰った。  
曲は今でも演奏される世界の名曲であったから、その精緻なアン  
サンブルをきく私の喜びは至上であり、後年自分達の合奏とあわ  
せて実に有益であった。しかしそれからの音楽分野はあまりにも  
複雑高級で、作曲に志す私の貧しい力ではとうてい手が出せな  
い。そこで自分にできそうな手近な仕事は日本語の歌曲であると  
思いこんだ私に何よりの手がかりは、エンケル先生の指揮で私た  
ちも参加していた合唱曲であった。当時の曲はもちろん私たち学  
生の実力を考慮したものであったが、いずれも本格的な曲であ  
り、ケルビーニのレクイエム（それは「橋の薫」と題した日本の  
史伝に基づく歌詞がついていた）、シューマンの「流浪の民」も  
石倉小三郎先生の名訳詞ができるまでは、西郷隆盛と僧月照のこ  
とを歌った「薩摩瀆」であり、その歌詞はエンケル先生の熱情的  
な指揮ぶりを反映してか悲壮味があり、今考えると軽いユーモア  
を感じるが、当時は結構感動してうたったのである。合唱曲から  
受ける感動はなかなか正体のつかみにくいもので、歌詞があれば  
一応その詩意に添うて音楽を受けとる。ことに曲が簡単に音楽的  
個性の弱い場合は明らかに詩の感情が主体となる。しかし歌の  
全然つかない純器楽がりっぱに成立するように、合唱曲に歌詞が  
無いか、あっても外国語で意味がよくわからなくても、その曲の  
旋律や和声の特性と、人声という独特の魅力を持つ音の高低強弱  
緩急の様な動きによって聴者は特定の感情を汲みとる。その感  
情は曲が良いほど強く深いが、さてそれを言葉で現わそうとする

とはつきりせず含蓄に相当の幅がある。だからこそ一つのふしに  
様々な替え唄や、時としてはかなりかけ離れた歌詞もつけられる  
のである。前記の「橋の薫」や「薩摩瀆」の場合、歌詞の作者鳥  
居悦先生などはあまり原詞に拘泥せず、階名で練習される合唱を  
幾度もきいて、その曲自身の感情を直に受けとり、その起伏抑揚  
にのせて自己流に詩的想像をはしらせ、多くの場合史実や伝説に  
からませて日本的歌詞を作られたのである。もちろん今日外国の  
曲をうたう場合には潔癖に原詞によるか、ほぼ原詞の意に添った  
訳詞を使うのである。石倉先生の「流浪の民」や近藤朔風氏の「ロ  
ーレライ」等は訳詞の最も成功せる例であるが、語系のちがう西  
欧の歌詞のうたい易い邦訳はきわめてむずかしく、あの時代とし  
てはいろいろな事情の制約からあのような歌詞が行なわれたこと  
と思う。話をもとに戻して私の学生時代の末頃ブラームスの「独  
乙鎮魂曲」の敷章を原語で合唱したこともある。独唱はベッツホ  
ルド夫人で感銘が深かった。ゲッツの「悲歌」、パーカーの「騎  
士の娘」、ブルッフの「美しきエレン」も合唱したがいずれもり  
っぱな訳詞で曲としっくり合っていた。  
それらの大曲のほか相当広い範囲からよく選ばれた数々の小曲  
がある。私に最も深い感動を与えたのはバッハのコーラルとベー  
トベン原曲の小さい合唱曲「菊の盃」であった。こういう音楽  
こそ在来の日本の音楽になかった高く豊かな音楽であり、自分の  
生涯をかけて学ぶに値するものと確信した。その感銘はその後幾  
多の名曲をきいた今日まで少しも変わらず胸中の珠のように残っ

ている。ユンケル先生はドイツ古典曲のほか「霧の巨」、「雁のさけび」(ヴォルガの舟唄)、チャイコフスキーの「三位一体の歌」のような東洋的哀愁のこもった曲をも選まれた。それらは上野出身の人たちが次々と伝えて日本の合唱の基調の一つとなっている。

私の入学の少し前、日本最初のオペラとしてグルックの「オルフォイス」が上演された。当時毎週一度主に先生方にピアノを教えておられたケーベル先生も関係され、ユンケル先生の指揮、石倉、乙骨両先生の訳詞、美術学校の和田英作、岡田三郎助両画伯の背景、柴田(三浦)環、吉川(戸倉)やま子、小室(安藤)千笑子の独唱、学生の合唱、学校の管絃楽団であった。世界のオペラ史に画期的な意義をもつこの作品によるわが国のスタートは忘れ難きことである。その初演に数年遅れて演奏会形式の再演が企てられ、その練習をききに來られたノーエル・ペリー先生の完璧な日本語の助音には驚かされた。先生はカトリックの学僧で音楽にくわしく、早い頃に「君が代」の色々な和声化なども試みられたわが国洋楽の隠れたる功勞者である。

私の上野入学当時きいたオーケストラの曲で今でも耳に残っているような氣のするのはシューベルトの「未完成交響曲」、モツアルトの奏ホ長調ピアノ協奏曲、これはハイドリッヒ先生の主演だった。先生は奇人伝にでも出てきそうな風格の方で、私が今なお愛惜する秀才故沢田柳吉氏や広田美須々さんのピアノの師であり、オルガン、ヴィオラ、フルニート等もてき作曲もされた。そのほか、バッハのヴァイオリン二重協奏曲、ワグネルのローヘン

グリン序曲等である。これらは今日でも全世界で愛好されるドイツの名曲であり、もちろん当時の演奏は必ずしも今のようには整ったものではなかったが、「未完成」の清浄な響き、モツアルトの純粋な音楽美、バッハの深い樂想と旋律応酬の妙味、ワグネルの巨濤の如く次第に盛り上りまたは沈みゆく音調は私の西欧音楽への憧憬を強く鞭打った。

伊沢先生の卓見によつて取り入れられた洋楽は学校唱歌に初まり、漸次このようなドイツ古典音楽を主調として進展して來たが、今から考えてもそれは正しかったと思う。ちか頃きくところによれば明治の初年にロシアから音楽をこめた日本の芸術教育について相当進んだ提案があつたそうである。また彫刻におけるイタリヤのラギーザの例のように南欧から、あるいは西仏から音楽の移入が行なわれたなら日本の洋楽も別趣の進展を見たかも知れないが、当時のドイツは西欧音楽の中心であり歴史的高揚を遂げた十九世紀音楽の本拠であつたから、たとえその音楽が日本傳來の音楽感に遠いものを含んでいても、そしてその学習の道は険しかったにせよ、洋楽の精神を識るための本筋であつたと思う。今では西欧の音階や旋法は学校教育によつて日本古來のものと同様に日本人のものとなり、さらにそれから新しい進路が求められているのである。モツアルトやベートーベンの音楽も世界各国と同じくわれらの古典となりつつあるのである。やがては全世界に通ずる表現を持つ力強い日本の音楽が生まれることと思う。

(日本芸術院会員・文化功勞者)

▲編集後記▲

新春おめでとうございます。

昨年の日本の文教行政は、後期中等教育と高等教育、また、就学前教育など、義務教育以後と以前の段階で、面的な普及充実政策が提案され、それらをよりよい方向へ実現していくための方法が示されてきています。

今年は、これら、教育制度の大綱にかかわる分野のいっそうの進展・向上をはかり、新しい時代の動向に合った形態をととのえ、くまなく求められてくる問題でしようが、それと並んで、教科書無償や学級定員の問題、教員養成と道徳教育など、個々の領域における重要な問題を、解決し、質を向上にわたる日本の教育のいっそうの改善をはかっていくなき時期に到達しているように思われます。

そこで、新春を機として、新年までは一年の計を立てるのにかかわり、教育や経済を専攻される諸先生にお集りいただいた教育計画の主要問題を、長期的な展望に立ち、しかも社会経済の進展との関連のもとに語りあってみました。そこには、いままでもなく、計画作成上の個々の具体的な問題点についての検討がなされていりますが、その高い立場に立って将来の教育計画の基本的な考え方やその背景にある理論、方向性などが数多く論じあわれています。熟読していただければ、この中の内容からは数多くの有益な教訓をいただくことができると思われれます。

昨年十月に開催された第二回日本文化教育会議については、その会議に出席された天城調査局長に、報告記を執筆していただきました。新春随想では、文化功労賞を受賞された備時潔先生にお願いし、学生時代のことを執筆していただきました。連載ものの平塚先生の「人物を中心とした明治以降女子教育史」は今回で六回目で、あと三四回続く予定です。

なお、昨年六月に実施した全国小・中学校学力調査の中間報告がまとまりましたのでここに掲載します。紙数のついでで若干割ってありますが、教育行政や指導のうえでいっそうに活用されることを期待します。

MEJ9446

文部時報 一月号

第一〇三七号

昭和三十九年一月五日 印刷

昭和三十九年一月十日 発行

著作権 文部省

発行者 株式会社 帝国地方行政学会

小川 平二

印刷所 株式会社 行政学会印刷所

東京都立川市曙町三の五五

営業所 株式会社 帝国地方行政学会 別館

東京都新宿区四五軒町五二

電話 (268) 二二四一(代表)

振替口座 東京 一〇〇〇〇

講読料

定価 一冊 七十円  
送料 六円  
一か年 八百四十円 (送料不要)  
ただし増大号、臨時号の場合は別に代金を申しあげます。なお講読の申し込みは、直接発行所、またはもよりの書店にお願いします。